

慈雲

第 58 号

2021/5

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る
百足屋町 3 7 5 番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@hotmail.com

<http://www.zuirenji.net/>

Shinshū Ōtani-ha

Jiunzan Zuirenji

Jiunkai



爾時世尊
即便微笑
有五色光
從佛口出

その時に世尊（せそん）、すなわち微笑（みしょう）
したまうに、五色（ごしき）の光ありて仏の口（み
くち）より出（い）ず。

【『観経』の言葉】

その時に世尊、つまりお釈迦さまはすぐさまにっこりと微笑まれたというのです。そしてその御口（みくち）から光を出される、と述べられています。「その時」とはいつのことを指すのでしょうか。王舎城の悲劇に遭い、苦悩する韋提希夫人に對してお釈迦さまはお身体全体の説法で夫人に諸仏の国々をお見せになりました。それらはいずれも理想的な場所でした。しかし夫人はまったく別の世界である阿弥陀仏の極樂世界に生まれたいと申したのです。さらにその為にはどのようなしたら良いかとお釈迦さまに尋ねました。夫人は初めて自らの足で立ち上がり、お浄土を願う気持ちで起こした「その時」です。その様子をご覧になっていたお釈迦さまは花が少し開くように静かに微笑まれたのです。

『観経』の言葉（表紙）の続き

お釈迦さまはにつこりと微笑まれました。それは歓喜のよそおいであります。では何をそれほど喜ばれたのでしょうか。あれほど自分の身に起きたことを嘆き苦しんでいた韋提希夫人が十方仏国の中から阿弥陀仏の極楽世界を選び、またそこへ生まれる行を請うたからです。このところを善導大師は「仏の本心にかない、また弥陀の願意をあらわす」と注釈されています。お釈迦さまは一代五十年の間にさまざまの人々にその機類にあつた説法をしてこられました。それはひとえに阿弥陀の本願の心を私たちに知らしめるためでありました。このたび韋提希夫人がみずから阿弥陀のお浄土を選び取ったということがこのようなお釈迦さまの本当のお心にかなうことであり、また夫人がみずから極楽浄土を選びそこを目指そうと立ち上がったことがそのまま阿弥陀の願心が夫人の心となって表れてきたのです。

さらに善導大師は、韋提希夫人のこの選びが「広く浄土の門を開く」と注意されています。韋提希夫人がただひとり悩

み苦しみから逃れて新しく道を歩き始めただけではなくて、この事実を聞くものはみな韋提希夫人と同じご利益を蒙るからであると言われています。いうなれば本願の念仏がはじめて地上の事実となったのです。それは韋提希夫人という一人の女性によって成し遂げられたのです。私たちのために「広く浄土の門をひらく役目を果たしてくださいましたのです。だからお釈迦さまはにつこりされたのです。

もし韋提希夫人がおられなかったら道理として本願の教えはすであつたでしょうが、事実としてこの歴史上に根を張ることはなかつたでしょう。お釈迦さまは口を開けて大笑はされません。静かな微笑みだつたと思えますが、韋提希夫人の求道は未来の私たちすべての救いに関わる事であつたのでその喜びはいかばかりだつたでしょう。

今月の表紙の言葉に続く経文を見てみましょう。

一一の光、いちいち 頻婆娑羅の頂びんばしやらを照らしいただき
たまう。その時に大王、しんげんさわり 幽閉ゆうへいにあり
といえども、心眼障なくして、は

るかに世尊を見たてまつりて、頭面ずめんに礼を作す。自然じねんに増進して阿那含あなごんと成りになき。

につこりされたお釈迦さまは五色の光をお口から出されてピンバシヤラ王の頂を照らしました。王は幽閉されているにもかかわらず障りなくその光を見ることができたのです。なぜなら肉眼ではなく心眼で見たからです。心の眼ならばどんなに物理的な障害があつても妨げにはなりません。そして幽閉されているところからはるか遠くにおられるお釈迦さまに向かつて深々とお辞儀をされました。そして小乗仏教でいうところの阿那含の境地へ進むことができたのです。やがて死に行く身であるピンバシヤラ王ですが、これで心穏やかに残る日々を過ごすことができるのです。

夫人の求道の一步は宗教的に大きな意味を持ちますが夫人の心には夫であるピンバシヤラのことがありました。それをお釈迦さまは知っておられるからこそまず王の苦しみを解き、妻である韋提希夫人の心痛を取り去つたのです。

仏事あれこれ

前二回にわたり紹介した三具足（みつぐそく）ですが、最後は花瓶（かひん）です。正面向かって左側に置き、花瓶の中には生花をお供えします。



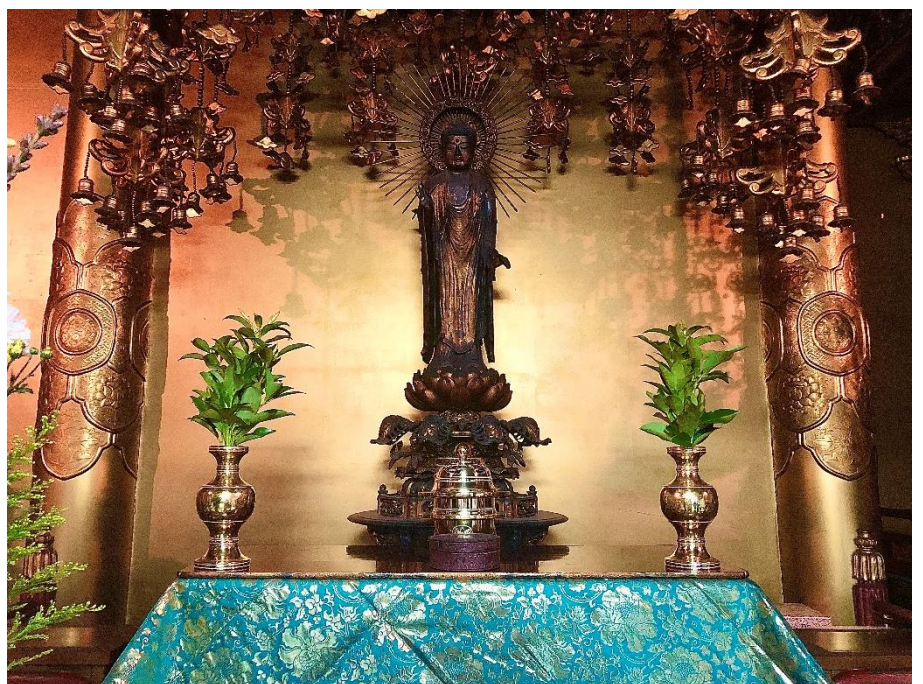
様々な種類の花瓶がありますが、下部写真のように紋が入っている場合は、菱形の八藤紋が右側で、抱牡丹紋が左側に来るようにお供えください。紋が入っていない場合は、花瓶上部の出っ張っている部分を正面にしてお供えします。生花選びの注意点としては、ご本尊が隠れない（多少被る程度は可）・蠟燭の火に近すぎないサイズをお選びください。

また三具足ではありませんが、花瓶



の紹介と関連して華瓶（けびょう）も紹介しておきます。華瓶とは、上卓（うわじょく）の両端に置かれている一対の瓶を指します（下図写真）。供え方としては水を入れて櫛（しきみ）を挿します。誤解されがちですが、華瓶は浄水を供える器であり、櫛は浄水作用の役割として挿しています。同じ花器でも全く違った働きを持ちます。

では、花瓶にはどんな役割があるのでしょうか。ご本尊へのお供え物という点でいえば、仏花をご本尊に背を向けて供えるのはいっけん不自然のよう



に見えますが仏花はお参りする我々の方に向かって供えます。

これは、我々に極楽浄土を現わして教えてくださっています。また、お浄土に生まれて欲しいという阿弥陀仏の願うお心が我々の方に向かっていることも表しています。（若院）

○おみがきのご案内

今年度も六回お磨きをいたします。三月のおみがきは皆さまのご協力をもちましてきれいに仕上がりました。有り難うございます。次回以降のおみがきにも皆さまのご協力をお願いいたします。おみがきは所要時間およそ一時間半ほどです。終了後仏具を所定の位置に戻し、きれいになったお内陣の前で参加者そろって短いお経をあげます。その後お茶とお菓子でしばし歓談して午前中には解散します。

五月十八日(火) 午前九時

八月一日(日) 午前八時三十分

九月十七日(金) 午前九時

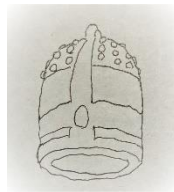
十一月十一日(木) 午前九時

十二月十九日(日) 午前九時

○法事の勤め方(その一)

今回は皆さまがご自宅で法事を勤める際にどのような準備をし、どのように当日進行するかということを通じてみたいと思います。まず年忌法要の数え方ですが、故人が亡くなられてから一年目が一周忌です。各年忌法要はご命日もしくはご命日までに勤めましよう。翌年には三回忌が回ってきます。

その四年後に七回忌、またその六年後に十三回忌が続きます(瑞蓮寺では昨年より七回忌以降の年忌法要に当たっておられるご先祖がある場合は各家庭にお知らせしております)。以降京都では十七回忌、二十五回忌、三十三回忌、五十回忌が主な回忌です。複数のご先祖の年忌法要を一度に勤める場合は二十三回忌や二十七回忌または三十七回忌、四十三回忌などで勤める事もあります。



日取りを決める際にはおよそ三月前にはお寺ならびに参列される親戚の方々と日程を調整して日時を決めます。日曜・祝日は申し込みが重なりがちです。早い分には何か月前でも構いませんのでお電話ください。

さて日が決まりましたらお内仏(仏壇)の清掃や粗供養の準備、またお斎(法要後の食事)の段取りなどやることとがたくさんあります。(次回に続く)

編集後記

『観経』の学びを続けていますが、そのことについて少し述べたいと思います。正式には『仏説観無量寿経』といいますが、私たちが浄土真宗の門徒は『仏説無量寿経』(大経)・『仏説阿弥陀経』(小経)と共に浄土三部経として大切にしてきました。中でも『観経』は韋提希夫人という一人の女性が主人公です。一国の王妃といえども私たちと同じように人生の業苦に遭い悩み苦しむ凡夫です。大経は阿弥陀仏の本願がどのように建てられたかといういわば法則・道理が説かれています。それに対して観経は煩惱を持つ凡夫がどのように本願の教えに出会い救われていくかという道程が説かれています。私は僧侶になって経典の学習を始める時に先生から「観経の信心の世界を先に学べ、それで『観経腹(ばら)』になつたらおのずから大経の法の世界に入れる。大経は六十歳までは読むな」という昔からの勉強の方法を教えていただきました。私は今年還暦を迎えました。最近、観経の学びを続けていて気づけば大経の法の世界の灯りが向こう側に見えることがあるのを感じます。